

着「執心」「妄執」「無念」といった自己完結した感情表現(内省的)を用いることで懺悔告白を促し、そうすることで幽霊自身の問題にすべてを転嫁することになる。こうした告白のパターンは結果的に幽霊を畏怖の対象ではなく、いわば救済の対象へと変容させることとなった。では、こうした告白のパターンはどのような機能(役割)を担うだろうか。

ブライヤン・ターナーによれば、キリスト教における告解はもともと信徒の仲間うちでおこなわれていた。それがやがて、一般化され、告白は「自らの罪を、それに対する赦免の権限を持つ聖職者に訴えること」で内面を吐露して浄化作用(カタルシス)をもたらす、治療儀礼としての要素をもっていたが、告白が強制されていく過程で(制度化されていく過程で)、人々は赦免されることよりも、罪に対して大きな不安を抱くようになり、懺悔の制度化によって罪に対する潜在的な不安が増大したという。これをヒントにみてみるなら幽霊能は、他人の懺悔の様子を舞台に仕組み、幽霊自身が懺悔し、告白すること、その劇を繰り返して観衆に現前化することは、ターナーの言葉を使えば「罪の意識を顕在化」することにつながるであろう。つまり観衆は仏教的世界観を内面化させていき、仏教的なモラリティーにもとづいて自らの行動を監視するようになるのではないかと察せられる。能の大成期、とくに修羅能は、武将たちをはじめ殺生を生業とする人々に罪の自覚を促し、その赦しの物語を劇化したものとして受容されたものではなからうか。

勧進に進出した頃、田楽能は、亡霊供養を仕組み、陰惨な描写で地獄の苦患を強調する内容を前面に出した。やがて時代が

下り世阿弥によって夢幻能が洗練したかたちで完成した。このときには血なまぐさは消え、貴人本位となり形の上で花鳥風月にことよせた幽霊の懺悔を仕組むことになるが、(それを意図したかは別にして)結果的に死者に対する畏怖の念、他界に対する恐怖も減じたのではないかと考えられる。

さらに懺悔告白形式の採用は、平板な事件の叙事的記述を、本人を幽霊として登場させることで抒情的な表現に変換させ、他者(の内面)に対する想像力を促すことにつながった。それは亡霊供養の唱導劇の構成が促した想像力だといえる。その一端を垣間見た。

祖霊を「作る」儀礼——シヨナ族の祖霊信仰と憑依——

松平 勇二

はじめに

「祖霊を『作る』儀礼」(*Kugadzira Mudzimu*)は、ジンバブエ共和国のシヨナ族の儀礼である。この儀礼は、ある人物に憑依しようとしている霊を特定し、霊媒師を誕生させる儀礼である。

シヨナ族はジンバブエの全人口の約八割(約一〇〇〇万人)を占める農耕民である。彼らは伝統的に祖霊や精霊を信仰の対象としてきた。祖霊が憑依する霊媒師は、肉体をもった祖霊、つまり祖先そのものとして扱われる。位の高い霊は、シヨナ族の各クランの宗教的かつ政治的リーダーである。*Guns and Rain* (David Lan, University of California Press, 1985)は、一九七〇年代に起きたジンバブエ解放闘争と霊媒師の関係を明

らかにした。黒人解放軍は、ジンバブエ各地の霊媒師の支持を得、その結果その霊媒師が影響力をもつ地域の市民もまた解放軍を支持した。

本発表では「祖霊を『作る』儀礼」をとりあげ、政治的、宗教的指導者となりうる霊媒師誕生の過程を考察する。

霊の階層構造

シヨナ族の信仰には、ムワリ(Mwari)と呼ばれる至高神が存在する。至高神は、この世のすべてを支配していると考えられており、「人類の創造主」(Musikavahhu)、「天の人」(Nyadenga)、などと表現される。至高神は人々の直接の祈りの対象ではない。人間の祈りは、精霊や祖霊の仲介によって神に届けられる。それらの霊は、神に近い順から、メポ(mhepo)〈精霊〉、モンドーロ(mhondoro)〈首長霊、祖霊〉、そしてその他の祖霊に分類される。これらの霊は特定の人物を憑依することとこの世にあらわれ、人々と直接対話し、その願いをきく。

祖霊を「作る」儀礼

人々と神を媒介する祖霊は、五つの儀礼を経て初めて信仰の対象となる。まずは、三つの葬送儀礼である。葬儀(nhano)、追悼儀礼(nyaradzvo)、そして相続・喪明けの儀礼(kurova gwa)である。これらの儀礼では、死者の霊が霊界(mhepo)に送られ、そこで浄化され、再び家族のもとへ守護霊として迎えらる。これらの儀礼を経ない霊は、悪霊(ngazi)として森の中をさまよいつけるといわれている。

霊媒師は祖霊の意志によって選ばれる。憑依はある日突然、不特定の人に起こる。ある人間に初めて憑依が起こったとき、

周囲の人間は、その霊が何者であるかを知らない。その霊が何者であるかを特定し、信仰の対象として正式に崇めるための準備儀礼が「祖霊を『作る』儀礼」である。同儀礼は二つの儀礼から成る。一つは清めの儀礼で「祖霊を洗う」(Kugeza mudzimu)とよばれる。この儀礼では、憑依の起こる兆候がある人間を、薬草と聖水で清め、悪霊を追い払うというものである。第二の儀礼では、酒や音楽を用いて憑依を誘発し、霊に対して尋問をおこなう儀礼である。霊の返答によって、その霊が祖霊であるか、精霊であるか、または悪霊であるかが判断される。これらの儀礼を経て初めて、信仰の対象、そして神と人間との媒介としての祖霊・精霊そしてそれらと一体のものとしての霊媒師が「作り」あげられるのである。この儀礼は霊媒師誕生の儀礼、すなわち伝統的な宗教的、政治的リーダーが誕生する儀礼なのである。

巫者の守護霊——東アジアでの比較——

川上 新二

本発表では、巫の守護霊にはその社会の構造が反映され、父系出自集団をもつ社会で活動する巫は父系の祖先や神を守護霊にするというファーストの指摘(Problems and Assumptions in an Anthropological Study of Religion, *Journal of the Royal Anthropological Institute*, 89(2), 1959)と関連させながら、韓国、奄美・沖縄、中国漢族の巫について考察した。

韓国は父系出自集団をもつ社会であり、韓国の降神巫は自分の婚家や実家の死者を守護霊とし、降神巫は守護霊になった死